

宮恵子となっている。

意外にも最近の流行作家は上位にはいないのだ。長い間活躍し、著作の多いベテラン作家や、四〇巻以上の長編漫画を書いているような作家が支持されている。

ここを訪れる熱心な漫画ファンは、すぐに飽きられてしまう漫画ではなく、何度も読む価値のある作家の漫画を求めているようである。

漫画の時代と言われ、ますます使命は重いと内記さんは語るが、蔵書の増加により置き場所がなくなり、書庫の増築を計画しているが資金の問題で苦勞されているようだ。

大量の漫画が毎日のように発行されていても、飽きられては捨てられる運命は、何ら変わっていないのではないだろうか。現に漫画を体系的に保存する場所は少なく、マンガ図書館も苦しい状況なのだ。現状を変えられるのは我々であり、この図書館を利用する事から始まるのではないだろうか。(白)

利用案内

- 所在地 新宿区早稲田鶴巻町五六五
- 電話 〇三―二〇三―六五二三
- 交通機関 地下鉄有楽町線 江戸川橋下車徒歩五分
- 開館時間 十二時～十九時
- 休館日 火・金曜日
- 入館料 一般二百円
- 閲覧料 三冊まで二百円 五冊まで三百円
- 館内閲覧のみ コピー可、一枚百円
- レファレンス 会員のみ
- 一般会員 年会費五千円
- 賛助会員 年会費一口、一万円
- 分類 作家別五十首順
- 年四回マンガ即売展開催

創刊号切抜帖

女性自身

今、女性週刊誌がブームだ。

松田聖子の離婚問題や三浦百恵の記事、電車の中吊りに見られるショックキングな見出しが読者を引きつけ、『週刊女性』『女性自身』『女性セブン』の三誌が、それぞれ一〇〇万部近い部数を発行しているという。

これだけの部数が出ている理由には、三誌の内容が足並みを揃え、いわば相乗効果をあげていることもあるだろう。その中で、「ちよっとDRY、辛口雑誌宣言」をうたい、発行部数一位の『セブン』を追いかける『女性自身』に焦点をあててみた。

『女性』が昭和三二―三三年に、『自身』が三三年、『セブン』が三八年にそれぞれ創刊され、三四年の皇太子御成婚、ミッチーブームの盛り上がりと共に、女性週刊誌は第一次ブームを迎える。

『女性自身』三三年一月二日創刊号はB5版、表紙には記事タイトルがなく、小さめに囲まれた写真で外人女性モデルがこちらを向いて笑っているというもの。表紙をめくると「女性自身のことば」というコー

ナーがあり、「あなたという美しいカクテルをつくる……」というコピーが書かれている。以下、特集記事(事件)をはじめ、ファッション・モデルの美容、海外トピックスと続き、中には「流行映画主題歌」なんていうコーナーもある。

読者に投稿をよびかけたコーナーでは、テーマが「異常体験」「愛と憎しみ」「男性への抗議」となっており、この時からコンセプトが確立されて現在に至っているのは興味深い。

四〇年代に入ると『ヤングレディ』『微笑』を加えて、三つのS(スター、スキャンダル、セックス)を中心に第二次ブームへと移行する。

創刊号のグラビアでは、現在の『エル』『アンアン』のような写真を使っていたのに対し、この頃のグラビアには、次々とスターが現れる。記事内容もスターのスキャンダル記事が巻頭を埋めるようになってくる。

また、昭和四二年六月二六日号から、現在までに一〇〇〇回を超える連載、人物クローズアップ・ルポ「シリーズ人間」が始まった。スターから皇室、さらには市井の人々の一生を細かくたどるこのドキュメントは、人生の裏側、光のあたらない苦勞部分を描き出し、読者に感銘をあたえてきた。

女性週刊誌の読者は、電車の中吊りの見出しを見ると、一体何が書いてあるのだろうと、ついページをめくりたくなる。この情報化時代にこれほど成功したアイキャッチャーはないだろう。

その記事を読み終えて、次のページをめくると衣食住に関する生活情報が載っており、核家族化が進む中、おばあちゃんの知恵を教えてくれる。

「馬鹿っ母」という言葉に代表されるショックキングな記事や、スターのゴシップ。その一方で「シリーズ人間」や役にたつ生活情報。人間の相反する両面にグイグイ迫る女性週刊誌。これから先、皇太子御成婚へ向けて、まだまだその勢いのおとろえる気配はない。

(H・K)